

禮服に就きて

婦人の職業

食品の貯藏法

國民家計標準の研究

飴の製法

雜錄

臺所の設計

會報

第二十五回學術談話會技藝科部記事

第二十六回學術談話會技藝科部記事

第二十七回學術談話會技藝科部記事

第二十八回學術談話會技藝科部記事

領收報告

母校記事

青野じう  
高島みさを  
神戶たすえ  
技三 横山エイ

南葉コブン

小村コズエ

臨教 三宅静子

技二 瀨尾静枝

臨教 原田りん

技三 池内よしえ

# 學術談話會技藝科部會報 第八號

## 住居の話

關根先生

今日は服装についての御話といふ御注文で御座いましたが題目にありますが通りに次に服装に就ての御話があります様でそれについて當番の方々はいろ／＼と御調べなされた様でありますからそれを伺つてから重複をさけて御話するといふので御座いますが時間の都合上出来ませぬから服装のことは後日にゆづりまして今日は衣食住の中住居に就て御話をいたしませう。

住居につきましては衛生的には窓をあけます事や又室内裝飾の事作法上の要件等が家事上に大いに關係いたして居りますから上代より現今に至るまでの變遷を申上げるのも強ちに不必要ではないと思ひますがなか／＼一朝一夕では御話が出来ませぬから極く大體の事を三十分乃至四十分間御清聴を煩しいと思ひます。

先づ上代の住居には今ある古式の神社の作り方がそれであります中古に至つて寢殿造でありますこれは古き御寺の本堂がそれであります近世武家の住居はやはりお寺でありますこれが禪宗の御寺に關係する即ち床の間書院等であります故に禪宗の寺によつてよくこれを見る事が出来すがこれを少し詳しく申し上げます。



上代の住居については只今の伊勢大廟が古代通りに出来て居ります只今は金物を打つてありますがそれを取のけると古代の住居は大神宮と大體同じで御座います又鎌倉神社は伊勢の大神宮を小形にしたものでありますそれまでになるのは即ち太古の家の造り方は原始時代のもので大體次の様なものであります。(圖略す)

先づ柱は掘立て屋根は萱で葺く四方に壁といふものがなく棟木の上から地まで垂木をかけ其上にコマヒを結んで萱藁の類を一面にかけて屋根とする其屋根の兩端の垂木を殊に長くして上部を交又して其端を屋根の上に出しておくこれを千木と申して今も神社の屋根は大抵こうなつて居る尤もこれは一般庶民の家には出来ぬ事まで至つて貴い方の御宮でなければ出来ぬ例となつて居つた。又棟の上に數本の木が横にならべてあつてこれを「かつを木」と申して居るがこれも元は葛緒で結んだ名残を止めて居るので「かつを木」は葛緒木か葛小木の義であらうといつた學者もある凡て大昔は柱や桁を切り組む事なく釘で打ちつける事もなくみな藤葛の類で結び固めたものである又昔は床を張らずに地面に敷物を布いて居た奈良朝時代までも「ひた土に藁解きしきて」と歌によんで下民などは地面に藁を布いて住んで居りました古代には穴居さへ御座いましたから先づこれ等はよい方で御座いませう。

入口は横について藁等で圍つて居りました此様な住居が後世になると高く上つて其下に柱を立て今までのが屋根になりました此面影の只今に残つて居りますのは出雲の大社であります外側は今も申上げた様でありますが中には敷物を布きます古語に皮疊など、申すことが御座いますが今の疊は床が三寸位あつて上疊となりましたが昔は疊む事の出来る薄い所からたゞみと申しました間をしきるには壁などなくて絹垣綾垣とて幕を張つてしきつたものでありますこれが上代の人の住居でありますが來年の大嘗會の由紀殿主基殿は此造りでありますこれまでは純日本式でありますこれがこれより後は外國との交通が開け支那三韓等の風が入り來つて變つて參ります。

これは法隆寺の夢殿食堂春日神社等の様になりました柱は丸く赤く塗つて壁は白く屋根は瓦で葺く様になりました昔は寺を瓦葺きと申しました支那では白家といふのは賤民の家であるが日本では白は静潔を表はすものとして貴ぶが支那では青とか赤とかに塗りますこれが我が國に入りました此様に變りました又春日神社の屋根にはかゝるものがついて居りますがこれは千木が形式に残つたものであります而しこれが又後になつて鬼瓦花瓦などをつける様になりました。

昔の役所向は塗る事が例でありまして瓦葺きにもしましたが、天子様の御住居になる宮殿は矢張昔のまゝの發達したものであります而し屋根は藁ではなくて檜皮葺となりました一般の家は白木で上代の風が残つて居りましたそれ故極く上代の風は古い神社を見るとわかると申したのはこれです。



奈良朝を経て平安時代になりますと貴人の住居は寢殿造りになりましたこれは上代の變遷したものであつて檜皮で葺いて四角でありました其四方に簀の子とて縁側様のものがありまして南庇東庇西庇北庇など、云ひましたその中に母屋がありまして其の圍りに柱が一間一間に立つて其の一間毎に格子があります其の格子を明けると大きな部屋になつて恰も蝨蠹の籠の様になるのであります其の一部を塗籠と申して物を置く處に又は寢所等といたしました。

壁は絶對にないと申してもよい位でありました故に盗人がはいつても戸迷することなどはございませんでした、身分のよい人には中央を寢殿と云つてこれに對の屋と云ふものがあつて娘等が居りました寢殿は正室で客の座ともし主人の居室にもしましてやすむ處ではありませぬ部屋によつて屋根は別口になつて居りましたそれは廊下がありまして中央には中庭があり之を壺と申しました藤壺桐壺等はこゝにその花がありました爲でございませぬ此の廊下の途中に中間がありましてその板をはずすと車の通ることが出来るやうになつて居りました之皆中古の寢殿造であります。

上流の人の中にはその死後我が家を寺に寄附したり説教所としたところから後世の寺の本堂が昔の寢殿造りに似たものと見えますかゝる住居には戸棚等は全くありませんこれは物品は唐櫃細櫃等に入れ納戸の中に入れて居りました便處は川上に付けて居たるも川のないところでは家の傍につくりしたために傍屋と云ふより厠屋といふことが出たのでありました鎌倉時代になつてから禪宗

が入り来りて住居に變遷を來しました禪僧が書院玄關を作る様になりました玄關は元の中門に當りますが之を玄關と名付ける様になりましたこの標本は銀閣寺金閣寺であります、銀閣寺は義政が立てたそのまゝのものであります玄とは奥深いと云ふ意味で僧侶が洒落に付けた名であつて最初は床の間には佛畫をかけ或は自分の師匠の筆跡等をかけました。

違棚は書物をおきました義政は風流人でありましたから文房具や盆栽等を置きました又書院窓といふものがありますがそれは昔僧がこゝで讀書をしたためであります、作法室は平書院であります武家では書院造りとして床の間と違棚と書院窓とを付けて昔はこれを出し文机ぶんぎと云ひました徳川家の御殿も京都の二條離宮や西本願寺等皆書院になつて居ります。

今日は皆それを引きついで居ります今日の床の間はその家の飾として大切の處となすやうになりました我國などは昔より家の飾は大層施したものであります即ち四時屏風がありましてそれには色紙形があつて下繪の心持をとりてそれに歌をかき又畫家に繪をかゝりしめたり詩歌をかいて客がある毎にそれを新しく致し又室内の裝飾に二階棚黒棚御厨子の三棚を据へ料紙硯箱亂箱鏡臺等を飾り付けなどいたしました又纒細縁とか申しまして赤地の錦に武田菱のあるものを用ひました尙下りては高麗縁を用ゐたりして室内を飾りました後世はこの裝飾がなくなりましたが禪僧の住んだ家から傳はりましたから外國ほど飾はせず至つて清楚なあつさりした裝飾になつたのです未だ



申したいことがたくさんありますが時間が来ましたから他日に譲つて今日はこれで止めて置きます

### 實科高等女學校家事實習教授細目

技四 蜂 谷 麟

西 館 ト メ

加 茂 ツ ヤ

下 田 ノ ブ

實科高等女學校が設置せられてから未だ年月も浅いことでございますので自然學科に置きましても十分ゆきといっていない様でございますそこで私たちは此度家事實習の教授細目を理想的に作りて見たいと思ひまして此研究にとりかゝつたのでございますけれど實科にも二ヶ年三ヶ年、四ヶ年と各々程度が異て居りますので其等にも適し又農家の地方商家の多い地方にも適す様に種々作つて見たいと思ひましたが何分研究の日數もございませんでしたので今度は四ヶ年程度の農家に於けるものを標準として作つて見たのでございます。實習に重きを置きましたので時間の都合上一年より家事科を置きました二學年で家事實習を授け三年より二ヶ年間理論と調理法を授ける心算でございますこれをこれから皆さんに御紹介しざつと説明して置きました成可皆様

から澤山に御批評を伺ひたいと存じます。

### 第一學年細目

第一學期			第二學期			第三學期		
週	教授事項	時間	週	教授事項	時間	週	教授事項	時間
一	家事實習の心得	二	一	塗物器具の取扱	二	一	洗濯用具の掃除方	二
二	身體の清潔	二	二	床飾品の掃除 置物掛物、花臺等	二	二	ハンカチ、エリ洗方及仕上げ	二
三	同	二	三	金屬器具の磨方 佛器裝飾品	二	三	白木綿の洗方 前かけ、襦袢、シャツ敷布	二
四	雑巾指	二	四	灰汁洗石鹼洗	二	四	足袋洗ひ	二
五	塵拂の作方	二	五	障子紙つき糊作り 障子剥き方糊張り	二	五	足袋繕ひ方	二
六	室内掃除法日本間	二	六	同張り方 切り張り 繕ひ張り	二	六	同	二
七	便所の掃除法	二	七	襖の掃除法及繕ひ方 硝子窓掃除法	二	七	靴下洗濯及補綴	二
八	農具及蠶具掃除法	二	八	傘提灯の取り扱方 わらじ扱方	二	八	同	二
九	其時期に於ける心掛	二	九	下駄下駄洗ひ 緒の繕ひ方	二	九	汚點拔茶、墨、血	二
十	物置馬小屋の整頓	二	十	同たて方	二	十	同但し絹物	二